

文によると、著者は今後徭役の研究に移行する意圖をしめしていられるから、その成果を大いに期待するとともに、この機會に愚問を呈して、著者が將來研究を展開されるなかにおいて高教を仰ごうとするものである。

おわりに著者の學問的態度と研究法について一言しておこう。本書を讀んでいるといつも目につくことは、著者が自説を提出するに先立つて、從來の學説を逐一列舉し、過去の研究經過が一見してわかるようにのべられていることである。秦漢史の根本史料である三史は古來の註釋も數多いことであり、これらの諸説を一々吟味してかからねばならないことはいうまでもないが、これがかならずしも嚴密に行なわれているとはいえず、この點、氏が周到に會註考證を試みてのちに自説を提出している研究態度は、秦漢史を學ぶ者のひとしく模範とすべきところであらう。そして當然のことながら、關係史料の取扱にあたつて一字一句をおろそかにせず、その眞意を克明に追及してゆく眞摯な操作は、氏の論考に充分の信頼を抱かせる迫力となっている。このようにして積みあげられた一〇餘篇の論文は、綿密周到な考證と徹底した思索によつて秦漢經濟史に新しい分野を開拓し、過去の研究にいちぢるしい前進をもたらしている。本書に收められた數々の玉篇は、そのほとんどすべてがわたくしの敬服賞嘆してやまないものばかりである。にもかかわらずさきに若干の愚問を呈したのは、中國古代史の根本問題の解決を、著者の能力に期待してやまないがゆえである。誤解があれば寛恕を賜わりたい。

(西村元佑)

Huang Hsing (黃興) and the Chinese Revolution

Chün-tu Hsieh (薛君度)
Stanford Studies in History, Economics,
and Political Science, XX
Stanford University Press, Stanford,
California, 1961. (260頁)

一九一一年十月十日、武昌における一發の砲聲とともに始まつた辛亥革命は、またたく間に全国各地の光復起義を呼び起し、滿清王朝に致命的打撃を與えてこれを覆した。幕藩體制を打倒した日本人民が天皇制を認めざるを得なかつたのに反し、光明に眼覺め、世界史的民族としての第一歩を踏出した中國人民は、その出發の當初から高らかに共和制のスローガンを掲げて二千年來の封建支配體制に終止符をうったのである。そのエネルギーが、ひきつづき袁世凱の帝制への野望を挫折させ、軍閥混戦と蔣介石の反動支配にとどめを刺して、人民共和國を創りあげたのである。しかし、當時においても、眞の解放のためには、中國人民はたんに封建支配層と闘わねばならなかつただけでなく、先進的な文明國として共和政體を誇るアメリカ・フランス等の帝國主義諸列強とも闘わねばならなかつた。その課題は未解決のまま殘されたのではあるが、それはともかくとしてアジアにおけるもつとも輝かしいブルジョア民主主義革命としての辛亥革命の意義は、その敗北が必然的であればあるだけ、なお一層徹底的に究明されなければならないであらう。

ところで、辛亥革命の前後において、政治面に華々しく活躍したのは所謂革命派と立憲派であり、とりわけ革命派の運動が清朝打倒の主要な要因となった。したがって革命史に關する従来の研究は革命派を中心にしてなされたものが多いのであるが、それも、ごく大雑把に言って革命派の理論的指導者であつた孫文中心のものが多く、研究が偏在しているというのが學界の現状である。しかし、本書はそれとはやや趣きを異にして、孫文・章炳麟とともに革命の三尊と並稱される黃興を中心に辛亥革命を見ていこうとするものであり、この點においてまず一應の注目すべき意義をもつものといえるであらう。

本書の著者の薛君度氏は、スタンフォード大學東アジア研究委員會特別研究員、政治學部の副研究員である。彼と黃興とは、義父子の關係にあり、黃興の次女黃德華は彼の夫人である。

まず、本書の構成について述べよう。最初に簡単な序文で問題が提出される。次に本文は、一、黃興の青少年時代、二、華興會と長沙起義、三、黃興と出會う以前の孫逸仙の活動、四、同盟會、五、滿州朝に對する鬭争、六、三・二九革命、七、武昌革命、八、共和國の創建、九、袁世凱に對する鬭争、十、晩年、十一、結論、の諸章よりなり、それに註、文獻目錄、用語解および索引が附けられている。

黃興については知られていないことも多いかと思うので、本書の叙述によりながら内容を紹介しよう。序文で著者は、同盟會成立後の革命運動が孫文と黃興の協同の下で遂行されたこと、民國建國後の公式文書には兩人が連署しているものが多いことから、黃興と孫文が辛亥革命のもっとも重要な二人の指導者であることを述べ、さ

らに彼らの協同指導性が辛亥革命理解の鍵であることを指摘する。そして、本書の目的は、そのような觀點から、諸文獻を綿密に調べて、黃興が關係している革命史上の諸事件を正確かつ詳細に述べることに置かれている。したがって、清朝を衰亡に導いたところの帝國主義の侵略、農民生活の破壊、民族ブルジョアジーの勃興、新知識階層の出現等の諸要因は、その意義の重要さにもかかわらず、本書では考慮の外に置くと著者は前以て斷っている。

黃興は一八七五年十月二五日、湖南省善化縣に生れた。幼名は軫、字は克強、號を厘午といい、後、革命活動を行なうようになって名を興と改めた。九二年に彼は秀才にパスしたが、既にその傳統的なコースを歩むよしもなく、九八年には兩湖書院に入學した。この頃、彼は譚嗣同や唐才常の影響を受けていたらしい。一九〇二年春に湖北省政府より日本留學を命ぜられ、東京の弘文書院に學んだが、彼は軍事教練や軍事學に興味をもち、學問は餘りしなかった。しかし、清朝支配の本質と共和政體の優越とを學びとつた日本留學は、彼の人生の轉換點となり、革命家としての黃興がここに誕生した。東京で、彼は湖北學生界・游學譯編を發行し、宣傳活動を行なうとともに、拒俄義勇軍の組織に當り、日本政府の彈壓でそれが挫折すると、軍國民教育會を設立して實踐活動を續けた。三年六月、書院を卒業した黃興は會の方針に従つて故郷での活動を行なうべく東京を發った。(第一章)

長沙に歸つた黃興は、明德學校で教鞭をとるかたわら、日本語學校を開いて革命運動を行ない、また、湖南最初の革命組織である華興會を設立した(三年十二月)。當時の彼の革命戰略は、學生・軍

隊・會黨の共同行動、および他地方との統一行動に要約される。實際、彼は、會黨と結合するために、日本留學生によつて占められた華興會の下部組織として同仇會を設立し、また、湖北とは科學補習所のリーダーである宋教仁・胡瑛らが華興會にも加盟するという仕方と連絡をとつていた。彼は、西太后の七十歳誕生日を期して長沙での起義を計ったが、事漏れて上海に飛んだ。上海共同租界で再度起義の計畫を練っている時、萬福華事件に卷添えをくつて租界警察に逮捕された（四年十一月二〇日）。一度釋放されたが、正體が暴露してまた官憲に追われたので、同年末には日本へ亡命した。その後、馬福益から洪江起義準備完了の報せがあり、彼はすぐに湖南に赴くが、事前に頓挫したので、再び日本へ亡命した。（第二章）

第三章は、一九〇五年までの孫文の革命運動を概述しているもので、ここでは省略する。ただ、著者は、孫文と黃興とが出會うまでは、兩湖と廣東の革命運動が、ほとんど獨立的に進行していたことを指摘している。

今や、長沙起義の英雄として、留日學生中に確固たる地歩を占めるに至つた黃興は、宮崎滔天の紹介で、五年七月十九日に孫文に會つた。彼らは各地の革命運動の統一の必要を痛感していたので、即座に共同して革命組織の統合に着手する。留學生有志を集めた三十日の會合では、統一革命組織の名稱を中國同盟會と定め、孫文が起草して黃興が承認した宣誓を採擇し、各自の署名した宣誓書は孫文が保管し、孫文のは黃興が保管することになった。ついで八月二十日、同盟會の正式の發會式が行なわれ、そこで孫文は總理に、黃興は庶務長（總理代行）に選ばれた。同盟會の成立は、組織的統一

と運動主體の變化という點で、革命史上劃期的なことであつた。同盟會が、成立後約一年で本土各省の出身者を網羅する約千名の會員（湖南一五七、湖北一〇六、廣東一二等）を擁し、かつ、その殆んどが東京在住の留日學生であつたことは、與中會のメンバーが殆んど廣東の華僑と會黨より成つていたことと際だった對照を示している。このようであつたので、同盟會では總理である孫文よりもむしろ黃興の影響力が強かつた。しかし、統一組織とはいえ、寄合世帯である同盟會は、國旗の制定をめぐる内訌を初めとして紛争がたえなかつた。とりわけ、章炳麟、宋教仁らの在京幹部が孫文を追放して黃興を總理にしようとした策動に至つて、それは極點に達する。

そのような動きに對して、黃興が派閥鬭争を避けることの重要性を説いて應じなかつたために、この策動は破綻するが、これ以後も光復會系の章炳麟らの孫文攻撃は續くのである。著者は、かかる紛争が孫文の不在のために起り、結局は孫文の指導性の下に和解させられたとの説に反對し、これはむしろ孫文の指導性そのものに起因する反對運動であつて、黃興が革命の大目的の前に孫文を擁護したことによつて同盟會の統一が保たれたと論ずる（胡漢民の評價を引用して自らの評價に代える）。さらに、著者は、これがたんに黨派的な嫉妬や個人の怨恨に起因するだけのものであつて、革命組織の目的や思想に關わるものではなかつたとも斷じている。（第四章）

同盟會成立より中華民國成立までの期間、黃興は武力鬭争の指導に明け暮れる。孫文の十度の武裝蜂起の内、同盟會成立後の八回のは、黃興が大抵その指揮に當つてゐる。同盟會は、一九〇七年から八年にかけて、たてつづけに六回の起義を決行するが、それは、

七年五月の黃岡起義に始まり、六月惠州七女湖起義、九月欽州起義、十二月廣西鎮南關起義、八年に入つて、三月末から五月初めにかけての欽廉上思起義、四、五月の雲南河口起義とつづく。この一連の起義は短くは一週間、長くも一月ぐらゐのものが、主として佛印と國境を接した地域に散發的に決行されたものである。しかも地域的にもせよ、農民との結合は、六次の起義中最大の規模で戦われた欽廉上思起義でさえ達成できなかった。それらはみな軍事的には敗北した。しかし、清朝に對する政治的示威としての、また革命的風潮を維持發展させたことの意義は大きい。六次に亘る武力闘争の失敗は、同盟會に財政的危機を招來し、また一時的にもせよ、一部の革命家をテロリズム信仰へとおしやる結果となつた。そして、この風潮に乗じた日本政府の民報彈壓事件（八年十月）によつて同盟會指令部が壊滅したので、黃興は勸學社を設立してそれに充て、體育會を再建して同盟會員に軍事教練を施した。この頃、廣東においては、新軍兵士を中心に約二千人の同盟會員が組織され、武裝蜂起の準備が進行していた。若干の手違いで、二月十二日（十年）に勃發してしまつたこの廣東新軍起義は、香港に居た黃興が指揮に駆けつける餘裕もないうちに一兩日で敗退した。（第五章）

この後、黃興は再び廣東における新軍を中心にした起義の計畫をたてているが、その内容は、後の武昌起義とそれにつづく革命の發展コースにほぼ完全に合致したものであつた。即ち、(1)主體的條件として、二月の失敗があつても新軍内の革命組織は完全には破壊されておらず、加えて、三千名以上の巡防營兵が革命に同情的であること等、(2)客觀的條件として、華南の要衝廣東を抑えれば廣東省を

掌中にでき、北伐は容易である、その廣東の奪取は新軍を同盟會に組織することと達せられること等、(3)同盟軍の問題としては、現在湖北を始めとして各地で革命派が起義の準備を進めていること等、(4)したがつて見透しの問題としては、一度廣東で事を舉げれば、山彥のこだまするがごとく南方諸省が起ち上るであらうことを述べている。その後、黃興の提案によつて、孫文・黃興ら同盟會指導部がベナンで會議し（十年十一月）、そこで黃興の戰略に沿つた新たな廣東起義計畫が決定された。今度の起義は同盟會の總力を擧げての計畫であり、資金もきわめて潤澤で準備は十分であつたが、若干の手違いのため香港からの武器・人員の輸送が出来ないまま、蜂起した。時に一九一一年四月二七日（陰曆三月二九日）午後四時。黃興は手兵一三〇名を率い、總督衙門を占領し、華々しく闘つたが、結局惨敗した。黃興の名をいやが上にも擧がらせたこの黃花岡起義を、彼は軍事的觀點からではなく、資金提供者の期待を裏切らないためという政治的理由から決行したのであるが、その意圖は十分に達せられたと著者は見ている。そしてここでも著者は、この起義によつて清朝は動搖させられ、人民は衝動を興えられ、その結果、武昌起義が準備されたと評價する胡漢民の言を以て自らの評價に代えている。（第六章）

一方、湖北では、同盟會の下部組織である共進會と獄中の胡瑛を通じて同盟會と結んでいる文學社とが、革命運動を行なつていた。そこへ、十一年七月には宋教仁らによる中部同盟會が発足し、華中の革命運動は拍車をかけられ、さらに秋には、文學社と共進會が協同することになり、革命の氣運はいよいよ熟した。同盟會の精華を

多數失った黃花岡起義の後、意氣消沈してテロリズムへの傾斜を見せていた黃興も、湖北の状況を知るに及んで再び武裝闘争に立ち上る。十月五日付の馮自由への手紙で、彼は、武昌の情勢が全く蜂起に好都合であり、これを成功させることが革命達成への道であることを述べ、海外の會員がそのための資金を早急に集めるように要請している。計畫では、黃興が武昌に到着してから蜂起するはずであったが、周知のように、突發事件に迫られて、十月十日、指導者のないままで起義は開始された。翌日午後には、革命軍は武昌を占領し、そこで、混成協統黎元洪をかつぎだして鄂軍都督に据えた。十二日には、漢陽と漢口が陥落した。二八日になって到着した黃興は、すぐさま總司令となって全軍を指揮したが、十一月一日には漢口より撤退した。以後、袁世凱の誇る精銳部隊三萬に對峙すること約一ヶ月、二七日にはついに漢陽をも放棄した。しかし、その間に、十月二日の長沙を始めとして、十餘省が獨立を達成した。著者は、武昌革命で黃興が果たした役割を評價するのに、ここでも居正と馮自由の説、即ち、黃興は二都失陷の罪によってではなく、直接清軍主力と對峙することによって他省の獨立を可能にした功によって評價されるべきで、その點からいえば黃興は孫文と並んで民國創建の最大の功績者である、との説を引くことによって、責を塞いでいる。(第七章)

二月四日、上海で開かれた省代表會議は、(1)臨時政府を南京に置く、(2)黃興を大元帥、黎元洪を副元帥とすることを決議した。この決議は黎元洪らの反對にあり、後に黃・黎の關係を逆轉させた決議がなされるが、今度は黃興の拒否にあつて收拾に道なく、孫文の

歸國が待たれることになった。さて、十二月二日に歸國した孫文は臨時總統に選ばれ、十二年一月一日、その任に就いた。孫文と陸軍總長黃興は、臨時政府の當面する諸困難を解決するために、個人的な能力を最大限に發揮するが、財政難を救うためには招商局等を擔保にした借款まで計畫している。加えて、南北統一を望む南京政府は、共和に賛成する袁世凱を大總統に選び、型の整った民國を創建した。その袁世凱は、革命派の諸々の思惑をすべて武力で踏みにじって、三月十日に北京で正式に大總統になった。(第八章)

そして、唐紹儀内閣が成立した。南方は陸軍總長のポストを取りそこね、黃興は南京留守となつて南方の兵權を掌握するに止まつた。しかし、北京政府の財政的壓迫のために軍隊を養えなくなった黃興は、六月には辭職を願い、その軍隊さえ解散した。十三年二月の總選舉で國民黨(前年の八月十三日に同盟會より改組)が大勝すると、袁世凱は、その指導者である宋教仁をテロの毒牙にかけ(三月二二日)、さらに五國借款二億五千萬磅を得て、獨裁體制を強固にした。まず、五月十五日には黃興から將軍號をとりあげ、六月九日には江西都督李烈鈞の官位を剝奪し、ついで壓迫は廣東の胡漢民(十四日)、安徽の柏文蔚に及んだ(同月末)。かくも系統的な袁世凱の攻撃に對し、黃興は一貫して南北協調の平和政策をとっていた。十二年九月に彼は、北京に向いて袁世凱と會談し、内閣の大員が國民黨に加盟し、強力な政黨を作ることによって議會制を確立し、そして強力な集權的國家を作る必要のあること等々を々とくと述べて、さらに、民國の基礎を強化するために、自分の影響力で政府と國民黨の間の不和を調定することまで申出ている。そして、

黃興は宋教仁暗殺、五國借款成立後も、民國の強化のために平和的手段による解決を標榜しつつける。七月十二日に李烈鈞が獨立を宣言するに及んで第二革命が勃發した。武昌の勇將黃興は、一時南京を占領しはしたが、殆んど十分な貢獻をなしていないまま、勃發より二ヶ月、九月には第二革命は敗北する。孫文は、敗北の原因を黃興への手紙の中で、袁の強さにはなくて味方の不統一に求め、興の平和主義を批判しているが、それに對して著者は、黃興の平和政策が失敗したからといって、そのことは必ずしも、逆に武力闘争の成功を保證しないという理由で黃興を擁護している。(第九章)

第二革命に敗れて黃興は、日本に亡命し、ついで、アメリカへ渡るが(十四年七月)、彼はアメリカ各地で、中國における共和制の危機と袁世凱の國を私する不法行爲に對する攻撃および第三革命の不可避を訴えて歩く。袁世凱の帝政の聲明が出るに及んで(十五年十二月十二日)、彼は即座に反對の通告を送り、同志に檄をとばして、資金募集に努力する。その間に、孫文は中華革命黨結成の準備を進め、黃興に副總理に就くことを要請するが、彼はそれを拒否したので孫文は獨自にそれを結黨し(一四年七月八日)、ここに同盟會以來の彼らの協同は少なくとも組織的には消滅した。二一ヶ條要求に對しても、孫文が袁世凱に反對する闘争を通じての拒否を考えたのに對し、黃興は反袁闘争を中止して舉國一致で日本に當る方針をとり、全く對立していた。しかし、黃興が孫文に反對する政黨を作ることはせず、一貫して孫文の仕事を妨害しなかったことを著者は強調する。帝政に反對して、蔡鍔が雲南獨立宣言を發するに及んで(十二月二五日)、第三革命が開始されたので、黃興は中國で活

動するために、十六年四月に日本へ向つて出發した。彼は日本で孫文と協同して、武器の買付等の面で活動をするが、六月二日に上海に歸り、フランス租界に住んで、南北統一のために彼の最後の活動を行なった。その年の十月十日、武昌起義五周年紀念日に病を得て、同月三十一日、その地に生を終えた。時に四二歳、嶽麓山で國葬に付された。(第十章)

そして、著者は言う。黃興の中國革命への寄與は、彼が理論的な著作を何も残していないので彼の政治思想との關連でとらえることはできない。彼は一九一七年以前に生きた革命家として、大抵の革命家と同様に、西洋の制度をモデルにしていた革命家であつて、人民大衆に對しては殆んど敬意を拂つていなかった。しかし、彼は類例のない社會改革思想をもつたのであつて、その實體が何であつたかは明かではないが、一貫して民生主義を實行することの重要性を強調している。現在、國民黨と共產黨が孫文以外の革命家に與えている不當に低い評價に基いてなされる黃興の評價は問題であらうと。(結論)

黃興の傳記には、彼の僚友であつた劉揆一の「黃興傳記」と、國民黨中央執行委員會黨史史料編纂委員會の「黃興傳」とがある。また、一九一四年にアメリカで出版された J.J. Mullovey 編の "A Revelation of The Chinese Revolution" も中國革命の眞の指導者としての黃興像を描こうとしたものである。同時代に生き、中國革命の息吹きを身をもつて感じとつた西洋の共和主義者が、袁世凱の獨裁に反抗している中國の共和主義者に送る滿腔の贊辭に充ちたマロニーのものはともかくとして、前二者についていえば、黃

興の生涯を一應通観しているとはいへ、たんに時間的繼起を追って現象的な記述がなされている小冊子に止まつており、傳記として十分なものとはいえない。したがつて、共和主義者としての黃興像を孫文との協同關係の中で捉えようとした本書は、先ずこの點で注目されるのである。そしてまた、ここに書かれた多くの事實は、劉揆一のものにも勿論書かれてはいるが、著者が序文で述べているように、諸文獻の十分な調査に基いたものであり、この點でも歴史的事實の確定として決定的なものと見てよいだろう。史料的には、華興會關係のことは主として劉揆一のものに依つており、それ以後は、より根本的な諸資料に基いて、それらに比較検討を加えている。また、未公刊の私書翰（一九一六年五月と十月二日の間に黃興が友人達に送つた電報の寫し）が用いられてはいるが、ここに用いられている限りでは特に注目されるほどのものではない。

著者が、黃興像を描くために用いている方法について考えて見よう。黃興を孫文との協同指導性の中で捉えること自體は、それなりに正當性を主張できるし、また共和制のために闘つた革命家としての黃興像も、彼が主觀的にそう考えていた限りにおいて妥當ではある。だが黃興が生きたのは、まさに辛亥革命の時代であり、彼がその革命の偉大な指導者の一人であつた以上、個人的な嗜好の問題に歴史を還元しないとすれば、彼の評價は密接に辛亥革命そのものの評價と係わつてこざるをえない。また、「革命いまだならず」と叫んだ孫文の遺志が一九四九年に至つて達成された以上、二つの革命を全く斷絶させて見るという非歴史的觀點をもたないならば新民主主義革命の先達としての黃興の位置が確定されなければならないで

あらう。

共和制のスローガンは、偉大であつた。だが、眞の共和制が何であるかを明らかにすることなしに、共和主義者である革命家黃興を評價することは不可能である。前述したように、黃興は民國創建以前には數次に及ぶ武裝闘争の第一線に立つて、人民の知的愚昧と生活破壊を強要する専制支配を打倒するために孜々として闘つた。しかるに民國創建以後は、南京軍の解散に始まり、一貫した平和協調の政策でもつてしか、袁世凱に對決しえなかつた。そして、それは二ヶ條要求に對する時、例の學國一致のスローガンとして典型的に表明されたのである。だが主觀的には兩期を通じて黃興が眞摯に共和制實現のために力を致そうとしていたことには變りがないのである。以前には、彼において、斷固たる闘争を通じてしか實現されないと考えられていたものが、現在では協調によつて達成されるものと考えられるに至つていただけである。つまり明らかに前封建支配が取り除かれた時、彼には、共和制は達成されたものであつたのであり、袁世凱との矛盾は味方内部の意見の相異としか考えられなかつたのである。ところが、現實の問題としては、革命は、たんに前近代的な障壁を克服しただけでは決して達成されないような性質のものに轉化してしたのであり、あたかも惡性の腫瘍のように、一つの封建支配構造を破壊した瞬間に裝いも新たに他のものが立塞がつてくるというような性質を帯びさせられていたのである。つまり、黃興の頭の中では共和制は達成されたはずであつたが、現實には、共和制を口にすると、袁世凱は、二億五千萬磅の借款を得て南方彈壓を行なつていたし、共和制の輝かしい舞臺である議會の指導者宋

教仁を暗殺し、國民黨議員の議席剝奪を行なう等、全く逆の方向へ走っていた。したがって、黃興の共和制とは、明々白々の對立物清朝Ⅱとは妥協のない闘争を行ないえても、表面的に共和制の型ができ上った時にはもはや闘いを支えられないような思想であり、ブルジョア共和思想であつたのである。

ところで、著者は民國創建以前の黃興に對して賞讃を吝まないのみならず、それ以後の黃興に對しても殆んど全面的に肯定的な評價を與えている。つまり、歴史の時点を隔てながらも、著者は黃興と全く同一の思想を持って、黃興そのものに自分を合體させながら、彼をブルジョア共和思想より評價した傳記を書いているのである。このために、著者にとっては頭の頂から足の先までの完全な革命家としての黃興像が出來上つていながら、しかもそれは偉大な革命家としての眞の歴史的評價を與えきれないという結果に終つているのである。

著者の強調する孫文と黃興の協調指導性についても問題がある。たしかに理論家としての指導者孫文と實踐家としての指導者黃興とは、民國創建までは諸々の内訌にもかかわらず協同して革命運動に携わつてきた。しかし、中華革命黨時代の孫文と黃興とは、たとえ黃興が孫文の動きを妨碍しなかつたとはいえ、協同關係にはなかつた。二一ヶ條要求に對する態度に典型的に見られたように、一度黃興が思想的に自らの立場を表明するや、それは孫文とは決定的に異つていた。にもかかわらず、孫文との協同を主張する著者の態度は、黃興の評價を孫文に對して與えられている高い地點にまで引上げるためでもないとするれば、我々には十分に理解したいものである。

黃興が理論的思想的著作を残していないからといって、彼を孫文とセツトにし、そのことによつて黃興を評價することは、協調している時の彼ら二人の關係しか明らかにできないという點で、きわめて不十分な評價基準でしかあり得ない。たとえ著作はなくとも、もし黃興自身の思想的位置ということを確認しないならば、孫文との關係も曖昧になり、また、章炳麟らとの關係も明らかにされず、まして人民大衆との關係を説明することは到底不可能である。黃興のようにかくも無思想な人物が、かくも巨大な映像を歴史のスクリーンに投じたことは一つの驚異であるが、著者のように彼に對して盲目的に自分を溶解させてしまえば、結局、黃興自身さえ解明できなくなるであらう。

最後に本書の敘述についていえば、著者は民國創建以前の諸起義の評價に關してはすべて同時代人の評價をもつて代辯させているのに反し、第二革命の黃興に關しては、孫文の批判に對して堂々と自説を述べて彼の平和協調政策を擁護していることが注目される。このことは、著者自身のブルジョア共和主義の立場を明白に確證しているが、たんにそれだけにとどまらず、それが一支配體制の暴力的廢絶に對する發言を慎みたいという著者の政治的配慮でなければ幸いである。以上二、三の點についての批判を試みたが、このような缺點にもかかわらず、本書は我々が批判的攝取を行なう限り、一應の意義と價值とは有しているといえるであらう。

しかし、勇敢で私心なく、度量宏大な、民族の英雄として、あくまで戰闘的民主主義者の立場を生きぬいた革命家としての黃興の傳記は、彼の偉大さのすべてを繼承し、彼のブルジョアの限界を止揚

した中國人民によってこそ、遠くない將來に書かれることである。
(一九六二、五・六) (狭間直樹)

Русско-Монгольские Посольские Отношения XVII века

Н. И. Шагина,
Москва, 1958. 173 c.

本書は表題の如く一七世紀の露蒙外交史研究に捧げられたものである。著者シヤスティナ氏は現在モスクワのアジア・アフリカ研究所にあってこの方面に关する研究に精力的な活動を示しておられる方である。わが國にあつては全く未開拓な分野に属するが、ソヴェトにあつても同様のようである。本書はその意味でこの方面に关する最初の專著であるといえる。事實、われわれは一七世紀全體を通じてロシアがモンゴリアと頻繁に交換していた外交使節のリストすら持つていない。しかしながらこの問題に关する歴史的文献がないかというとは決してそうではない。從來露支交渉史に关する諸研究中に折にふれ扱われていたのであつて、とくに革命以前のロシアの歴史學者を中心に解明せられつつあつた。例えば一七世紀の露支交渉史研究の場合、ロシアの東方、嚴密に言えばシベリア東部への外交政策と密接に結びついているが、この問題は最初シベリア史研究において扱われていた。これら研究にはモンゴルの汗や諸侯等にかんする若干のロシアの外交交渉の記述が含まれており、露支交渉史中の個々のエピソードとして數行、もしくは一章が費されてい

るにすぎない。それでもこの方面の研究は從來かなりの量の書物が發表されており、露蒙交渉史研究自體はきわめて不十分ではあるが、かなり豊富なビブリオグラフィ―を作成することができる。その中でも一八世紀の半官半民の歴史家 ショーラー G. Müller の「ロシア史集成」(Sammlung Russischer Geschichte, St. Petersburg, Band 8. 1763) ソンペンシャール I. Fischer の「シベリア」(Sibirischer Geschichte von der Entdeckung Sibiriens bis auf die Eroberung dieses Landes durch die russischen Waffen, St. Petersburg, 1768) はいずれもシベリア史を扱いながらも露蒙交渉史に关する數多くのすぐれた記述に富むものである。とくにこの兩者は、一七世紀を通じてロシアと密接な交渉をもつたモンゴルのアルティン汗 Altyn-Khans にかんする豊富な記述を含んでいる。そして史料的にもロシア政府の外交文書を利用しているだけにその價值は高い。さらに降つては例のバツデー J. F. Baddley の Russia, Mongolia and China. Being some record of the relations between them from the beginning of the 17th century to the death of the Tsar Alexei Mikhailovitch A. D. 1662—1676, etc. London, 1919, 2 Vols. はこの兩者を参考にし、バツデー自身が目睹したロシアの外交文書を利用して一七世紀のロシア、モンゴリア、中國三者の外交關係を概説したものである。しかしこれらはいずれも露蒙交渉史を専門に扱つたものではなく、いわばロシアと中國の外交關係を記述するに當つて、この兩大國の中間に位置するモンゴリアに必然的にふれざるをえなかつた事情がこれらの著者をして露蒙交渉史を扱わせたのである。シャ